

わが校の紹介

「生きるとは分かち合うこと」
の精神の涵養を目指して

養父市立養父中学校長

佐藤 秀和

毎年4月には、但馬の奇祭といわれる「お走りまつり」が行われます。但馬五社めぐりの一つである養父神社を出発したみこしが大屋川を渡り（川みこしという）、広谷・浅野を経て建屋の斎神社に向かいます。

このお走りまつりのコース周辺を校区とする養父中学校は、平成元年度に養父・広谷・建屋の3中学校を統合して旧養父町唯一の中学校として現在地に開校しました。

本校の校訓は「自立・協同・創造」です。養父中学校という小さな社会の中ですが、仲間を支え合いを大切にするとともに、挑戦する気迫を持って自己の確立を図ることを通して、郷土を背負って立てる人材の育成を目指しています。

また、本校は開校以来「生きることは分かち合うこと」という共存共栄の精神が受け継がれています。そのため、他校では珍しいボランティア部が存在し、福祉活動を中心に取り組んでいます。

本校の特色ある学校づくりの取り組みとして、少人数指導の充実があげられます。目的加配を受けて、数学科4名、英語科4名のスタッフで英・数の2



教科を、1・2年生は学級を2分割して少人数で指導し、3年生はT.T（同室複数指導）による指導で基礎的な事項の学習の達成状況を高めたり、つまずきに対して早期対応するなどの手立てを行っています。

人間は、自分の力で生きていくようであって、実は大きな力によって生かされています。私たちが生きていくうえで最も大切なものである、陽の光・さわやかな空気・田畑を潤す水は、対価を求めることなく等しく与えられています。人間関係におけるあいさつ、思いやりの心や愛情も無償を前提とした行為です。

本校で学ぶ一人ひとりの生徒の心に「生きることは分かち合うこと」の精神が育まれるよう努めています。

窓 ふれあいのある活動

子どもたちにとって、夏休み中の学習や活動が、ゆったりとした時間の中で家庭や地域のふれあい・支えのもとにできることが大切です。

「ひとりで本を愛すること」を覚える子どもなどというのは

まずいない。誰かが、文字で書かれた言葉のすばらしい世界へ、彼らを誘い込んでやらなくてはならない。誰かが、その世界へ行く道を教えてやらなくてはならない（オリバー・プレスコット『わが子に読み聞かせする父親』より）

何が読もうか、何を書こうか、何を作ろうかなどと、子どもたちが話を聞いてもらったり、具体的なヒントをもらったりするなど、家庭・地域の大人による支援や関わり方が問われるところです。

充実した夏休みとは、ふれあいをもちに安心して活動に没頭できることではないでしょうか。

（学校教育課）

まちの文化財⑭

「八鹿の「造り物」」

7月16日、17日の八鹿夏まつりで「造り物」が展示されました。大森・諏訪町・下町・宮町・仲町・新町・栄町・京口・天子の9地区に加えて、八鹿公民館のわんぱくクラブの10チームが参加しました。最優秀のタイヤ賞は、建具部品で作った京口区の兵庫県立養蚕学校でした。

に回転する姿が印象的でした。栄町区では、菊花などの生花を集めて羽ばたく「はばタン」を絵画のように描きました。

造り物は、今から約200年前の江戸時代後期、大阪から全国に流行しました。現在も全国の約50カ所を受け継がれている貴重な伝統工芸です。広谷の観音まつりのほか、江原、和田山、梁瀬、夜久野などの夏まつりでも造られています。南但馬は、全国でも造り物の中心地の一つです。

造り物は「一式飾り」といって建材の金具関係・台所用品関係・山野にあるものなど、同じ種類の材料を利用しなければなりません。

造り物には見たて細工という技術があります。天子区の「はばタン」の体は、プラスチックの菊を一つひとつ貼り合わせて造っていますが、少し離れてみるとその材料が他にはない存在感を示しています。これが見たて細工です。独自のアイデアで「一式飾り」や「見たて細工」に挑戦するのが造り物なのです。

今年、のじぎく兵庫国体のマスコット「はばタン」が3地区で造られました。天子区はオードブルに使われるプラスチックの菊花を集めて丸顔の「はばタン」を造っていました。

新町三博物館は今年で5年目です。また、ようか武道館では生け花展が開催されました。夏まつりに合わせて一年に一度、八鹿の街角に美術館や博物館が開館します。



（社会教育課）